様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　６月　７日現在

機関番号：３２６２１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５２０７１４
研究課題名（和文）　現代北米のムスリムに関する人類学基礎調査

研究課題名（英文）　Basic Anthropological Research on Contemporary North American Muslims

研究代表者
赤堀　雅幸（AKAHORI MASAYUKI）
上智大学・外国語学部・教授
研究者番号：２０２７０５３０

研究成果の概要（和文）：北米、とくにアメリカ合衆国に暮らすムスリムについてその概要を明らかにし、現在の研究状況を概括して、その後の本格的な研究に備えた。広範囲に文献情報を収集し目録を刊行するとともに、一定数の文献を収集、また専門家との研究情報の交換、ムスリム団体情報の収集と分析、3 回にわたる現地調査を実施し、2011 年度以降のサンフランシスコとを拠点としたより発展的な調査の基盤を構築した。

研究成果の概要（英文）：This research summarized the general situation and current trends of research with regard to Muslims in North America and particularly the USA. Extensive bibliographical data concerning the field was collected and a basic bibliography was published, while at the same time a specified number of documents were accumulated, exchange of academic information with experts was conducted, and the collection and analysis of information obtained from Islamic groups was carried out. Onsite fieldwork was actualized on three separate occasions. A base was created in San Francisco for a much more developmental investigation to be carried out after 2011.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２００９年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１０年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：文化人類学
科研費の分科・細目：文化人類学　文化人類学・民俗学
キーワード：イスラーム、アメリカ、地域研究、移民、改宗、黒人

１．研究開始当初の背景

研究代表者は 1988 年から 3 年余にわたってエジプト・アラブ共和国西部砂漠の定住ベドウィンの間で現地調査に従事し、以来居住環境の大きな変化のなかで人々がどのような生活戦略を採用し、その暮らしを変容させていっているかを人類学の視点から研究してきた（e.g. AKAHORI Masayuki, “Democracy in the Desert? The Bedouin in the Western Desert and the National Election to the People’s Assembly in 1990, Egypt,” *Nilo-Ethiopian Studies* 2 (1994): 15-25）。その調査は同時に、イスラーム主義の興隆を 19 世紀以来のエジプト近代化過程の流れのなかに捉え直す論考（e.g. 赤堀雅幸「イスラームと多元主義、イスラームの多元主義」泉邦寿他編『グローバル化する世界と文化の多元性』上智大学出版会、2005 年）などと結びつけられ、近代化とのその黄昏の時代としての現代を論ずる一群の論文を形成してきた。とくに最近では、ベドウィンの聖者信仰に関

する調査研究の延長上に、様々な地域の民衆イスラームの実践とその今日的形態の研究に力点を置くようになっている。

そうした研究の展開には、1997 年度科学研究費補助金学術創成研究「現代イスラーム世界の動態的研究」（研究代表者：佐藤次高・東京大学大学院・人文社会系研究科・教授、当時）に始まる一連の共同研究が深く関わっている。「スーフィズム・聖者信仰研究会」と通称されるこの共同研究では、本研究の研究代表者が主宰者の一人となり、15 年の長きにわたって、スーフィズムおよび聖者信仰（研究代表者はこれを一個の複合体として、「スーフィズム・聖者信仰複合」と呼んでいる）に関する学際的研究を進展させてきた（代表的成果としては、赤堀雅幸・東長靖・堀川徹（編）『イスラームの神秘主義と聖者信仰』東京大学出版会、2005 年）。

そして、この共同研究が進展するにつれ、研究代表者がいくつかの個別分野の研究不足を痛感するにいたったことが、本研究を企画し実施を決意するにいたった大きな理由をなしている。

取り組みが不足した分野の例としては、中東の都市部を対象にした現代のスーフィズム・聖者信仰複合の人類学的研究、イスラーム思想に精通した専門家によるサハラ以南アフリカや東南アジアのスーフィズム・聖者信仰複合の研究、観光や大衆消費経済と結びついたスーフィズム・聖者信仰複合の研究などが挙げられる。しかし、これらについては、着手する若手研究者が徐々に現れつつあり、しばらくはその展開と充実を待つ形でも、対応としては充分であろうと推測された（実際に研究開始後の 3 年間の間に、これらの分野に取り組む若手研究者が現れてきている）。

ところが、本研究の主題の一部をなす北米ムスリムのスーフィズムと聖者信仰については、まったくと言ってよいほど日本国内に研究がなく、また研究の着手しようとする若手研究者もいないという現実があった。北米では 1980 年代以降に急速なムスリム人口の増大が見られ、そこにスーフィズムが大きな役割を果たしているとの見方がしばしば提起されている。にもかかわらず、北米のスーフィズムに関する研究としてよく知られた著作はなく、さらに言えば、スーフィズム研究以前の問題として、北米におけるイスラームの状況を概観する研究もほとんどない状況であった。こうして、北米のムスリムに関する基礎的情報の収集蓄積をまずなすことが、研究代表者の上述の研究活動の全体に有用であり、また若手研究者の関心をひくこととともなり、ひいては現代イスラームの人類学的研究に貢献すると確信するにいたった。

２．研究の目的

北米における現代イスラームの展開には三つの潮流を認めることができる。

すなわち、①黒人解放運動との関連において発達してきたブラック・ムスリム運動、②移民によるムスリム・コミュニティの形成と変容、③白人中間層を主たる担い手とし、スーフィズムと結びついた改宗ムスリムの活動、である。これ以外にも、④それらを総合して人種、民族などを超えたイスラームの普遍性を北米において回復しようとする潮流や、⑤イスラームに由来しながらも脱宗教化した文化運動、精神運動を指向する運動なども認めることができるが、いずれの情報も断片的であって、全体像が見えるにいたっていない。実際、この数年、北米中東学会等での研究発表では、北米のムスリム研究がかなり盛んに行われている印象があるにもかかわらず、それらの多くは理論的展開に乏しく、ムスリムによる護教的な研究や、問題意識の低い現状報告的なものに留まっている感が否めない。

したがって、本研究においてはまず、先行研究の網羅と研究対象となりうる団体の拾い出しによって、北米、とくにアメリカ合衆国に生きるムスリムの全体像を把握し、また彼らに関する米国での研究状況を概観することに主眼を置くこととした。

さらに、1980 年代以降の日本における現代イスラーム研究が、ムスリムが多数派である中東や東南アジアなどにおけるイスラーム主義研究を中心に展開し、それが現代のイスラームを政治化と本質主義の方向に偏ったものに見せてきたとの反省にも、本研究は目を向けた。ここから、現代イスラームのより多様な様態へと、研究者の目を向けさせることが副次的な目的として設定された。

本研究は、直ちに新しい原理の発見に結びつくとは言えないし、全く新奇の着想や方法論にもとづいて出発したものではなかった。しかし、北米のムスリム人口の急増が指摘されるようになった 1990 年代になされているべきであったものの、全くといってよいほど未開拓なままに放置されていた分野に、初めて本格的に着手したという点で先駆性を有し、至急に実施される必要があったことは間違いない。

加えて、研究代表者が行うスーフィズム・聖者信仰複合の共同研究との関連からすれば、当該領域で、現代に関する人類学等社会科学分野での研究がきわめて脆弱であり、本研究がその点を補う意義も小さくないとの考量も、本研究の狙いには含まれていた。

３．研究の方法

各種の書誌情報を利用してより精度の高い先行研究の文献目録作成を行い、同時に北米における主要なムスリム団体を、収集した文献や豊富に提供されているネット上の情報を活用して一覧化し、これに基づいて現地での概況調査、各種団体発行資料類の収集もある程度行うこととした。これにより、文献目録および団体一覧を可能な限り高い水準で作成し、基礎的文献の収集分析、現地団体や関連分野の研究者との間に交流の端緒を開き、その後の具体的事例研究への道筋を付けるのが、本研究の方法である。

(1)研究体制

日本国内においては、複数の研究分担者をもって取り組む共同研究に発展させるには研究開始時点ではあまりに先行研究が不足しており、本研究は応募者単独で取り組むこととした。

ただし、それと同時に、平成 18 年度に開始された「NIHU プログラム・イスラーム地域研究」（代表：佐藤次高・早稲田大学・文学学術院・教授）との関連づけも視野に入れた。同プログラムは大学共同利用機関法人人間文化研究機構（NIHU）と上智大学他国内 4 大学および 1 図書館の共同により、イスラーム地域研究の拠点を形成することを目指しており、研究代表者はスーフィズム・聖者信仰複合に関する共同研究を継承発展させ、上智大学にこの分野の安定した研究拠点を築くべく活動しており、本研究についても、そこでの研究会などで発表を行い、思想研究、歴史学、人類学などの専門家から意見を聴取して研究の方向性を見定めていった。

(2)北米研究に関する応募者の理解の促進

研究代表者は中東研究に関しては一定の研究業績を上げてきており、その知見の蓄積や調査研究能力は、本研究においても様々な形で有効に働いたが、他方において北米についての地域理解、とくに重要となる北米の宗教状況に関する理解は充分とは言いがたい水準であったため、積極的に北米研究の基礎文献の収集読み込みを行うとともに、専門家からの意見聴取に取り組んだ。この分野での地域研究に関して上智大学は一定の実績を有しており、外国語学部、国際教養学部等の専門家から助力を得ることができた。

(3)米国の専門家との意見交換

新たに開拓する研究分野について、すでに先鞭となる研究成果を発表している米国の研究者と積極的に意見交換を行った。中東研究の分野で、これまでも交流を重ねてきた研究者に協力や助言を請うた他、現地調査の過程で知遇を得た多くの研究者たちから様々な情報を得た。あわせて、今後接触すべき専門家のリストアップを進めた。

(4)文献情報の収集と目録の刊行

収集した文献や *Index Islamicus on CD-ROM*, ver. 9 (Leiden: Brill, 2007)などの代表的文献目録類を出発点に情報を蓄積し、複数の分類方法を試した上で目録作成作業を進めた。これについては大学院学生などに補助作業を依頼した。

(5)文献の収集

研究の推進、さらに研究終了後のさらなる展開に重要と思われる文献については、一定程度まで収集を行い、その使途に応じて一部は設備備品として上智大学アジア文化研究所図書室に所蔵し、一部は図書資料として応募者の手元に置いた。

(6)ムスリム団体情報の収集

ムスリム団体について、まとまった情報がすでにどの程度あるかを含め、文献やネットから得られる情報を中心に、収集と適切な基準に基づく分類方法の確定を行い、整理を進めた。これについても、大学院学生などに補助作業を依頼した。

(7)現地調査

日本国内において上述の作業を進める傍ら、各年度に 1 回、ムスリムの集住地域の都市部において現地調査を実施した。米国の専門家との接触、研究交流の他、主要なムスリム団体訪問他を主目的とし、それらの団体が刊行、販売ないし提供する諸種の資料の収集も行った。

４．研究成果

(1)研究体制

予定通り研究代表者単独で研究を推進しつつ、NIHU プログラム・イスラーム地域研究における地域研究を通して、研究の報校正等に関して様々な忠告などを得ることができた。

本研究の成果を公開した主要な刊行物の一つである『北米ムスリム研究文献目録』は、NIHU プログラム・イスラーム地域研究の上智大学拠点から、SIAS ワーキング・ペーパー・シリーズの第 11 号として刊行された。

(2) 北米研究に関する応募者の理解の促進

北米研究の概説書から始めて、収集した文献の他、国内の研究機関にある図書、雑誌等について、読み込みを進めた。また、本学の他、東京大学、早稲田大学、玉川大学、京都大学、国立民族学博物館、同志社大学、立命館大学など

で文献調査と関連分野の研究者との研究情報交換を行った。

(3)米国の専門家との意見交換

J. Anderson、D. F. Eickelman ら、人類学を専門とする旧知の在米研究者の情報提供や仲介を受けて、Y. Y. Haddad、M. Hermansen ら本分野で先駆的な取り組みを見せている研究者と連絡をとり、研究の方向性や具体的調査地などについて助言を受けた。

また、2009、2010 年度にはカリフォルニア大学バークレイ校に隣接した神学大学院連合イスラーム研究センター（Center for Islamic Studies at the Graduate Theological Union）や、同校の敷地内にあって、北米初の公的なムスリム教育機関として 2009 年に開設されたザイトゥーナ・カレッジ（Zaytuna College）の研究者たちと親しく交わり、センター長の M. Jiwa やカレッジ創設者の一人 H. Bazian、またバークレイ校のイスラーム研究専門家などと、その後も交流を継続している。

これら実際に意見を交わすことのできた専門家の他、200 名余りの北米ムスリム研究者について情報を収集したが、リストとして公開するには網羅性や掲載基準の問題があり、2011 年度に作業を継続することとした。

(4)文献情報の収集と目録の刊行

大学院学生の補助を得て広範囲に文献情報を収集し、暫定的にではあるが、2,000 件弱の文献情報を集め、整理の上で雑誌論文を除く図書のうち主立ったもの 800 件余りを収めて目録を刊行した。目録は暫定版として、前述のごとく NIHU プログラム・イスラーム地域研究から刊行され、共同研究への参加者他本研究に関心を示してくれた専門家、大学院学生等に送付した。

2011 年 6 月にはウェブ上にも公開し、そこでは継続して文献情報をふやしていく予定である。

(5)文献の収集

目録作成作業の過程から、とくに重要と思われる図書を選び出し、92 冊を購入して読み込みを進めた。うち 44 冊については、2008 年度中に大学に寄贈し、アジア文化研究所所蔵図書として広く学生、研究者の利用に供したが、管理上の便宜と研究推進上の必要から、2009 年度購入分18冊と2010年度購入分30冊については、図書資料として手元に置き、読み込みの完了したものから順次、設備備品としての寄贈の処理をとることとした。

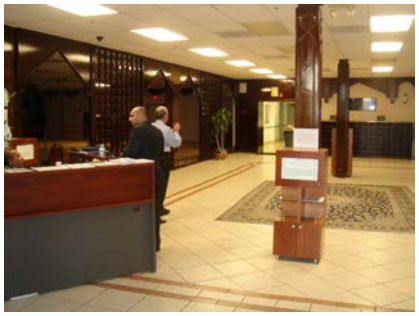
(6)ムスリム団体情報の収集

研究者との交流、訪問したムスリム団体からの情報、ウェブ上での調査、在米ムスリム向けの商工名鑑、案内書などの入手により、かなりの情報を蓄積することができたが、予想以上に多数の団体があり、まとまった形での情報の公開にはいたらなかった。2011 年度以降も作業を継続する。

(7)現地調査

各年度夏期に調査を実施する予定であったが、別用務による中東での現地調査との関係から、2 月ないし 3 月に実施せざるをえなかった。

2008年度は2月にロサンジェルスで実施した。主たる訪問先に想定していた全米ムスリム評議会は、ロサンジェルスでは組織としての実態に乏しかったなどの問題はあったが、かわって南アジア系の移民ムスリムが多い南カリフォルニア・イスラーム協会、複数のモスク代表者が集まって構成する南カリフォルニア・イスラーム・シューラー評議会などで実りある情報収集ができた。ロサンジェルスはとくにイラン系ムスリムの集住で知られているが、広大な市域にムスリム団体が散在しており、やや調査は行いにくい印象であった。



南カリフォルニア・イスラーム協会
（ロサンジェルス、2009 年 2 月）

2010 年度の現地調査は、3 月にサンフランシスコで実施した。昨年度の調査にまして、多くのムスリム団体（アラブ世界からの移民を中心とするヌール・アルイスラーム・モスク、サンフランシスコ・イスラーム協会、サンフランシスコ・ムスリム・コミュニティ・センター、改宗ムスリムが成員の大半を占めるニーマトゥッラーヒー教団修道場、イラン系他のシーア派ムスリムが運営する北カリフォルニア・イスラーム文化センター等）を訪問することができ、今後の継続的調査に協力が得られる見込みが立った。北カリフォルニア・イスラーム文化センターの仲介により、神学大学院連合イスラーム研究センターと連絡が取れたのも収穫であった。多種多様なムスリム団体が存在し、また本研究に多大な関心を示す研究者も多いことから、サンフランシスコはきわめて有望な調査候補地であると判断された。ちなみに事前に約束を取り付けて訪問する形の調査とは別に、宿泊施設近辺のドラッグストアなどにムスリム移民が経営する店舗が多く、そこでの聞き取りも参考になった。

2011 年は 3 月にバークレイおよびニューヨークで実施した。バーククレイでは、神学大学院連合イスラーム研究センター、ザイトゥーナ・

ヌール・アルイスラーム・モスク
（サンフランシスコ、2010 年 3 月）

北カリフォルニア・イスラーム文化センター
（サンフランシスコ、2010 年 3 月）

ザイトゥーナ・カレッジ
（サンフランシスコ、2011 年 3 月）

ニューヨーク・イスラーム文化センター
（ニューヨーク、2011 年 3 月）

カレッジ、カリフォルニア大学バークレイ校ムスリム学生連盟などを訪問して研究交流を行うとともに、各国からのムスリム学生などに聞き取り調査を行った。大西洋岸のムスリム集住地域の一つ、ニューヨークでは、この都市で最大のモスクであるニューヨーク・イスラーム文化センター他を訪問した。また、大西洋岸のロサンジェルス、サンフランシスコとでは目にしなかったが、露天商の多くが移民ムスリムであり、彼らからの聞き取りも興味深い参考データとなった。なお、調査中に、神学大学院連合イスラーム研究センターから客員研究員として迎えられる内諾が得られ、今後は同地を現地調査の拠点とすることを決定した。

聞き取り調査による情報収集以外に、各都市のムスリム団体リスト、商工名鑑などをはじめとして、現地以外では手に入れがたい資料多数の収集を行うことができた。

(8)成果公開

刊行した『北米ムスリム研究文献目録』と、公開準備を薦めている『北米ムスリム団体一覧』『北米ムスリム研究者一覧』の他、本研究の理論面を検討した論考 1 本を発表したが、計画調書上において予定していた、調査データに基づく研究動向報告等を学術雑誌に発表するまでにはいたらなかった。これは予測した以上に北米のムスリムの生活様態が多様で、その組織も様々であり、かつ研究にも集約的な方向は見られず、多岐にわたっていたために、まとめきれなかったことが大きい。

(9)成果の総括

研究の結果、北米のムスリムに関する文献は膨大な数があり、今日さらに急速に増しつつあることがわかった。しかし、体系的かつ専門的な研究に基づく著作の割合は低く、ムスリムによる護教的あるいは自派擁護的な著作、非ムスリムによるイスラーム脅威論の色彩が強い著作、また依拠する情報が曖昧で印象論の域を出ないような著作が目に付いた。

学術的な論考についても、調査データをとりまとめただけで、充分な分析が施されていない報告書の類が多い。かろうじて、マルコム X、エライジャ・ムハンマドなど著名なムスリム個人に関する研究や、質問票を利用し、限定されたコミュニティを対象に行われた社会学調査などに一定の研究蓄積をみることができる。また、民族誌的な調査には、ムスリムを対象として設定するのではなく、アラブ系やイラン系など、エスニシティによって対象を設定したコミュニティ・スタディに見るべきものがある。

こうした傾向は、英語での圧倒的な出版量、研究対象となる人々自身による活発な情報発信、実に広い裾野を持つ研究状況などの点で、米国の先住民研究や移民研究に共通の特徴とも言える。また、自文化ないし自文化の一部をなすものについて語るときの、対象との距離の取り方のむずかしさという、人類学につきものの問題が、民族誌調査の少なさに反映している可能性も否定できない。

これらの点からすれば、本研究の目的設定が基本的に正しく、日本人の中東研究者が北米ムスリムの研究を行うことの意義は少なからずあるとの確信は、本研究の実践を通して深まった。北米のムスリムを研究対象とする専門家に、圧倒的にムスリム、とくに移民系ムスリムが多い

という事実も、本研究の継続と発展の必要を高めるだろう。

今後、さらに先行研究を渉猟し、研究者情報を収集し、ムスリム団体についても広範に調べていくことは、無論有意義であり、継続していく。NIHU プログラム・イスラーム地域研究における共同研究との関連から言えば、今回、充分に調べることのできなかった大規模なムスリム団体のうちでも、アメリカ・イスラーム高等評議会（Islamic Supreme Council of America）の調査などは必須であろう。

他方、ムスリム団体について調べていくうちに明らかになったように、個々のムスリム、ムスリム団体、地域のコミュニティなどは、その成り立ち、活動、目的などが実に様々であり、そうした統一のない多様性こそが、今日の米国のムスリムの一般的状況であると思われる。北米イスラーム協会（Islamic Society of North America）、アメリカ・ムスリム協会（American Society of Muslims）など、少数の全国組織はあっても、それらでさえ、実際には独立した様々な団体の集合体であって、全米に渡るような一的な動向を調べ上げていくことはむずかしい。したがって、今後はサンフランシスコに根を張った、着実な現地調査によって北米のムスリムに関する理解を深めていくことが、研究代表者の専門からいっても有効であると判断する。

予想以上の情報収集量を充分に整理することができなかったことや、ネイション・オブ・イスラームなどブラック・ムスリム運動系の組織と連絡をとることができなかったこと、より長期の現地調査を実施できなかったことなどは、残念でならないが、サンフランシスコを拠点に現地調査を進めつつ、日米の専門家と連携し、今後の共同研究への発展を図る素地を固めることはできた。今後は早期に短報ないし研究動向報告の形で、学会誌に成果を報告し、その後、上述のとおり、本格的な調査研究に着手する予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計２件）

私市正年・寺田勇文・赤堀雅幸（編）、上智大学出版会、『グローバル化のなかの宗教—衰退・再生・変貌』（地域立脚型グローバル・スタディーズ叢書 4 巻）、2010 年、246 頁（担当執筆部分 65-90 頁）

赤堀雅幸、NIHU プログラム　イスラーム地域研究　上智大学アジア文化研究所・イスラーム研究センター、『北米ムスリム研究文献目録』2011 年、42 頁

〔その他〕
ホームページ等
http://pweb.sophia.ac.jp/akahori/

６．研究組織
(1)研究代表者
赤堀　雅幸（AKAHORI MASAYUKI）
上智大学・外国語学部・教授
研究者番号：２０２７０５３０

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし